歴史よもやま話　28

　万葉歌　その時代背景　その1：白村江の戦い

**熟田津に船乗りせんと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな**

　（万葉集巻1　額田王）

　661年　倭国（斉明天皇）水軍は、鬼室福信ら百済の遺民の要請に応じて、百済国復興の援軍を送る。瀬戸内海・九州・対馬経由朝鮮半島に向う。途中熟田津 (現在の愛媛県松山付近、斉明天皇の病状が悪化しその養生のため)に停泊、天皇の病状が小康を得たので船団が九州に向けて出航した。この時斉明天皇の代わりに**額田王**が詠んだ歌とされる。なお、斉明天皇は九州行在所で崩御し、**中大兄皇子**が遠征軍を指揮することになる。

　660年　朝鮮半島・百済は、唐・新羅連合軍により滅ぼされるが、鬼室福信、黒歯常之ら残党による百済復興運動が起きる。当時倭国に亡命中の百済太子・豊璋を擁立すべく、倭国に援軍要請された。斉明天皇の皇太子・中大兄皇子はこれを受諾し、第一派：一万余人、船舶170隻の水軍を派遣した。

　朝鮮半島に於ける唐・新羅連合軍との戦いは、太子・豊璋が対立する鬼室福信を斬殺するなど内紛が起き、最後は**白村江の海戦**で唐の水軍に惨敗する。白村江での惨敗要因に、河口付近における7ｍもの潮の干満差があったという。先着していた唐・新羅軍船団はこの潮の干満差を熟知しており、地域に不慣れな倭国水軍は全くの不利を強いられた結果であった。

　称制・中大兄皇子は唐・新羅軍が倭国に攻めてくるかもしれないと、対馬や太宰府沿岸の防備を固めること、そして陸奧、相模、房総など東国から**防人**として兵を徴集し、難波に引率して集合、瀬戸内海を九州の砦に船で移送した。

　**唐衣裾に取りつき泣く子らを置きてそ来ぬや母なしにして**

　唐衣にすがって泣きつく子供たちを（防人に出るため）置いてきてしまったことよ。母もいないのに

　**わが妻はいたく恋ひらし飲む水に影さえ見えて世に忘られず**

　私の妻はとても恋しがっているようだ。飲もうとする水に影まで見えてくる。決して忘れられないことだ。

　**今日よりは顧みなくて大君の醜の御盾（しこのみたて）と出で立つ吾は**

　今日からは我が身を顧みることもなく天皇の強い盾となって吾は出で立つ

　万葉集には地方の農民から徴集された防人たちが、妻や恋人、父母、子供たちを想って詠んだ歌が

100首以上収録されている。（巻20）

中大兄皇子は、唐・新羅連合軍の襲撃を恐れ、より遠い近江（大津宮）に都を移す。

**三輪山をしかも隠すか雲だにも情（こころ）あらなも隠さふべしや**

（万葉集巻1　額田王）

　飛鳥をあとにして大津京に行く途中、懐かしい三輪山をなぜ隠すのか、せめて雲だけでも思いやりがあってほしい。隠したりしないでほしい。

　中大兄皇子は大津宮で皇位（天智天皇）に就き、百済救援で中断されていた「大化の改新」天皇を中心とする律令制度の確立に意を注ぐことになる。